

2021年
12月20日
月曜日

●退任教授最終チャペル講話／高林 喜久生 教授（財政学）

私が銀行員であったころ

今年度末をもって定年退職いたします。閑学に着任したのが1996年ですので、26年間お世話になったこととなります。今回は、私事中心でまことに恐縮なのですが、「私が銀行員であったころ」というタイトルで「身の上話」をすることをお許しいただきたいと思えます。

大学の教員になるには大学を卒業して大学院に進んで研鑽を積むというのが一般的だと思います。私の場合、もともと大学教員になるという進路は想定外で、卒業後、銀行（住友信託銀行、現在の三井住友信託銀行）に入って、35歳まで13年間で銀行で過ごしました（ただし、役所への出向期間が3年ありました）。

今、定年退職の直前になって振り返って見ると自分の原点は、はるか昔の銀行員時代であったとあらためて思うのです。今でもよく銀行員時

代の夢を見ます。夢の中で私はいたい20代か30代です。目が覚めて歳をとっている自分に向かって「気持ちは一方でほっとする気持ちがあります。具体的にどんな夢を見たいか」と預金集めの外回りしている夢です。銀行に勤めて、最初の5年間は支店の預金集めの外回りをしていました。私は、かなり要領が悪くて、とくに最初のころは失敗ばかりしていました。例えば、取引の勧誘に行った開業医の先生に不手際のため、「この忙しいのに」と激怒されて目の前で契約書をビリビリと破り捨てられたりして、血の気が引くような思いをしました。40年以上前のことなのによく覚えていますが、そんなことが何度かあったのですが、それでも辞めずに続けられたのは、職場の人間関係に恵まれていたこと、助けられたことが大きいと

思います。先ほどの目の前で契約書を破られた開業医の先生に対しては、その日のうちに信頼する先輩が対応してくれて事なきを得ました。そのときの安堵したときの気持ちもとてもよく覚えています。仕事が厳しくてもつらくても職場の人間関係がよければ踏みとどまることが多いと思うのです。仕事がつらくて職場の人間関係もよくないということになるとかなり厳しいです。そういう意味では社風とか会社の雰囲気というのはかなり大事だと思います。学生のみなさんも就活の際に、もちろん限界はありますがインターンシップ等で実際に現場を見て一緒に働きたいか確認することを強くお勧めします。

話を戻しますが、それから先ほどの契約書を破られた件などでは、トランプルは隠さず速やかに報告して、

信頼できる多くの人を巻き込むことが必要だと学びました。時間が経つにつれていろんな要因が重なって対応が難しくなっていくきます。当時、私はおそらく真つ青な顔をして支店に戻ってきたのだと思います。そこで先輩や回りの人が心配して声をかけてくれて、それで結果として、早くトランプルを明らかにすることができ、速やかなトランプル処理が可能になったと思えます。

また、支店では、本来の業務をきちんとすることは当然ですが「いわゆる雑用を大事にすること」を教えられました。雑用をするのに、基本的には特別なスキルは必要ありません。しかし、通常業務を円滑に進めるためのサポートや回りの環境を整えるなど、欠かせない業務であるといえます。雑用をしっかりとすることで回りの信頼も得ていくように思い

ます。

そして、よく社会では経済学は役に立たないと言われますが、私の外回り銀行員時代を振り返ると、経済学は役に立つ、もっと勉強しておけばよかったというのが実感です。例えば、当時外回り営業に出る前に一通り日経新聞を読んでおくことが日課でした。そして、経済学を学んでおくと日経新聞を深く読むことができます。なぜ日経新聞を読んでおく必要があるかというと、お客さんも日経新聞を読んでいるからです。お客さんから、「今朝の日経には、このようなニュースが出ていたけど。」と振られたときに、ちゃんと対応できないと信用を失いかねません。また、こちらは銀行員ですから金利や為替・株価の動向にコメントを求められたりすることもありました。学生時代に経済学を曲がりなりにも学んでいたことは、それらの背景にあるメカニズムを理解して、いくらかでも筋道立てて話しうるうえで役立つのではないかと思っています。

5年間の支店の外回り営業のあと、調査部というところに配属になりました。今度は日本経済の景気の予測や金融の分析をする経済調査の仕事です。たまたま調査部に配属さ

れたことが今の私の出発点になっているのですが、昨日まで暑い中や大雨の中、外回り営業をしていたのに、今日からはデスクワークで経済のレポートを書けという仕事に変わったわけです。日本の企業はこのような人事異動を結構平気でよくやります。「就職」ではなくていわゆる「就社」というわけです。「就社」にはメリットとデメリットがあります。会社の中で多くの職種があるのでも、今いるところに向いていなくても向いている職種に配属される可能性がありますが、逆に自分の意志にかかわらず望んでいない職種の職場に配属されることもあると思います。

配属された先の調査部では、「勘でものを言うな」とか「証拠で示せ」とか「細かいところをおろそかにするな」ということを厳しく指導されました。このことは経済分析において大事なことで、今でも学生のみなさんに「証拠（エビデンス）を持って語る」ことの重要性を強調しています。

銀行時代の終わりの方で3年間、大蔵省（現在の財務省）の財政金融研究所というところに向向することになりました。その当時研究所に在籍されていた当代一流の経済学者の

先生に、若い間に2年間から3年間がいいから、死ぬ気で勉強することが大事と教えられました。ずっと死ぬ気で頑張り続けることは難しいけれども2〜3年であれば普通の人でもできるということだったと思います。また、このとき私はもう30歳近くになっていましたが、2〜3年であれば頑張れる、今からでも間に合うと思ったことを記憶しています。

大蔵省への出向のあと、再び銀行の調査部に戻り、しばらくして調査部+大蔵省時代の研究成果を本としてまとめることができました。それに注目してくれた前任校の広島大学に移籍し、その6年後に関学にお世話になることになりました。収入面をはじめ銀行の方がよかったことも少なくないのですが、銀行員から大蔵省の若者の人生の出発の局面に立ち会うことができたこと、また場合によってはその人生を後押しできることがあったことだと思います。卒業生が元気で活躍しているのを見るのはとてもうれしいことで、私がこの世界に足を踏み入れた意義が少しでもあったかと自己満足しています。また、私のゼミ生の中から私のいた銀行に入って、はるか年下の後輩になる者も少なからずいて、不思議な

感慨にとられます。

今でもコロナ禍前までは銀行時代の同期入社組で数ヶ月ごとに集まって、同窓会を開いていました。そのときには気持ちは私が一番若いと勝手に自負していました。私の銀行の同期生はほぼ全員リタイアしていますが、私はまだまだ現役だからです。学生のみなさんの相手を日々させていたでいて、振り回されることもあって、しかし結果としてパワーをもらっているということを感じています。

最初にお話ししたように私が銀行を去ることにしたのは35歳のときでした。例えば、会社生活の中で35歳というのはひとつの節目に当たります。管理職になる手前で会社の中で今後どのような分野でキャリアが積めるのか、どの程度のポストまで行けるのか、見え始めて来る時期に当たると思います。今でも30代半ばになったゼミの卒業生と会うと当時の自分と重なります。学生のみなさん方の多くは卒業後、私と同じように会社員の道を歩まれます。そういう意味で私はみなさん方と体験を共有することができるのではないかと思います。